

白髪一雄展 1980年代、90年代の絵画作品を展示

ファーガス・マカフリー東京
2019年3月23日(土)～5月18日(土)
オープニング・レセプション：3月23日 午後6～8時

ファーガス・マカフリー東京は3月23日から5月18日まで**白髪一雄展**を開催いたします。都内では10年以上ぶりとなる本作家の個展では、力強く身体の運動性を感じさせるキャンバス作品、また紙に描かれた油彩の大作を含めた、**1980年代、90年代**の作品群を展示いたします。



前衛美術集団「具体美術協会」の最も重要なメンバーの一人として活動した白髪一雄は、**1954年**から自身の足を使って制作される革新的な「フット・ペインティング」で力強く躍動的な抽象形態を描き始めました。キャンバスをスタジオの床に平置きし、壁から吊るされたロープにつかまり体を支えながら、油絵具を足で押し出したり蹴ったりしてキャンバスの表面に躍動的なストロークを生み出しました。白髪は作家人生の大部分を通してこの制作方法を続け、絵画をブラシで描くという歴史的な手法を、身体を用いて行うという全く新しい制作のあり方の可能性を広げ続けました。「まるで戦場で、疲れ果て崩れ落ちるまで走り回っているかのように描きたい。」と作家自身は語っています。

1950年半ば、フット・ペインティングを始めた当時、彼は未加工で吸収性の高い紙を好んで使用していました。支持体が油絵具の余剰の油を吸い込むことで、顔料の力強いストロークの周りに琥珀色の光背が生み出されました。**1958年**フランスの画商、学芸員のミシェル・タピエが海外で彼の作品を流通させ始めると、キャンバスに直接描く作品の方が輸送や海外での展示に適しているという理由から、白髪はこの支持体から離れます。それでも彼は、日本の長く豊かな歴史により生み出された脆く繊細な紙と、西洋の歴史と伝統の意味合いを含める粘着性のある油彩の組み合わせに魅了され続けていました。**1985年**絵具の液体性により強い興味を持った彼は透明度の高い絵具を使用し、しみのような下塗りが施された作品を制作します。本展では希少なこれらの作品を一堂に展示し、その特性と魅力をご覧ください。例えば《破天轟（はてんごう）》（**1985年**）では滑らかで暴力的に足で描かれた黒のストロークが底面にたまった油によって下から支えられており、中心の力強いほとぼしりに印象的な影を落としています。

本展では作家の代表的な技法であるフット・ペインティングで制作された単色の作品群も含まれています。1971年天台宗、密教の僧侶になるため仏門にはいった白髪は素道の法名を得た後、1974年入壇灌頂をうけ、再び絵画制作を開始します。それ以降、不動明王へ般若心経をあげることが制作前の準備の一環として習慣となりました。柔らかく淡い色調を用いた《泥錫（でいしゃく）》（1987年）は、初期の暴力的なエネルギーに満ちた作品に比べ、崇高さや静けさを想起させます。1980年代、作品形式の実験を重ねた作家は《破天轟》のように、下塗りをしていないキャンバスに単色の絵具で描かれる作品を制作しています。1990年代には《風魔（ふうま）》（1996年）に見られるような濃い黒、鮮やかな青、明るい橙色など大胆な色使いが現れるようになります。本作品では、優雅に描かれた黒の下に赤みがかかったオレンジ色が配され、そして特筆すべきは鮮やかな青と白の筋が画面左上に鮮烈に描きこまれています。



ダイナミックではっきりとした配色の《風魔》は幼少期の恐怖の体験が源になっている、と後年作家は回想しています。本作品について、白髪は次のように記しています。「私が幼少のころ、尼崎にはひよ辻（日雇辻）という所があって、つむじ風が冬になって舞うと子供達は恐れた。昔は朝この辻に立ちん棒が、手配師の仕事を待って大勢並んだという。冬のおりついた夜道に、下駄の高い音が町の家並みにひびき、夜空には満点の星が煌めいて

いた。そこへ六甲嵐（おろし）は突然やって来て、その時魔ものが現れるという評判があって、私はそれがとてもおそろしかった。「風魔」はそんな幼少時の潜在意識から、生まれた作品かもしれない。製作は1996年11月22日。」¹

白髪一雄

1924年兵庫県尼崎市生まれ。京都で日本画を学ぶなか、形式や素材にとらわれる日本画のあり方に不満を感じた白髪は他数名の生徒たちとともに「現代美術懇談会」に参加、手と指を用いた油彩画制作を実験的に開始します。彼はチューブに詰められ即座に使用することができる粘着性のある油彩は、美術学校で使用していた不便で薄められた墨をベースとする顔料よりもより「自由」であると感じます。1955年日本の前衛集団である「具体美術協会」へ参加、リーダーである吉原治良から多くの影響を受け「これまでになかったものを作るため、行為的で、素材を始点とする絵画制作をさらに発展させていきます。具体メンバーの当時、絵画制作とパフォーマンスを並行して追求し、全身を使いまるで泥が濃く柔軟性のある絵具であるかのように演じる

「泥に挑む」(1955年)や、細長くまるで羽のような腕のついた劇的な赤い衣装に身を包み背景にある真っ黒な舞台の幕に色の切り目を入れる「超現代三番叟」(1957年)など、二つの実践を統合したパフォーマンス絵画を生み出しました。白髪が作家人生の中で一貫して探求し続けた身体と素材の関係性は、80歳を超えてもなお精力的に続けられたフット・ペインティングの大作で最もよく知られています。

ファーガス・マカフリー

ファーガス・マカフリーは2006年の設立以来、元永定正、白髪一雄、高松次郎など、戦後日本美術の国際的な評価を確立させるうえで中心的な役割を担ってまいりました。マーシャ・ハフィフ、ビルギット・ユルゲンセン、リチャード・ノナス、ジグマー・ポルケ、カロール・ラマなど独創性に富んだ気鋭の西洋作家の作品展示も行なっています。日本の美術や文化と深く沿うため2018年3月、ロバート・ライマン展を皮切りに東京・表参道に画廊を開設いたしました。2019年はパティ・スミス、ジャスパール・ジョーンズほか多様なプログラムを予定しています。

プレスのお問い合わせ：

ファーガス・マカフリー東京

Tel : +81-(0)3-6447-2660

Email : tokyo@fergusmccaffrey.com

Images:

1. Kazuo Shiraga, *Hatengo* (白髪一雄《破天轟》)1985, Oil and ink on Japanese paper, 82 5/8 x 103 3/4 inches (210 x 263.5 cm) © The Estate of Kazuo Shiraga
2. Kazuo Shiraga, *Deishaku* (白髪一雄《泥錫》) 1987, Oil on paper mounted on board, 68 1/4 x 90 1/4 inches (173.5 x 229.5 cm) © The Estate of Kazuo Shiraga
3. Kazuo Shiraga, *Fuma* (白髪一雄《風魔》) 1996, Oil on canvas, 76 3/8 x 102 inches (194 x 259.1 cm) © The Estate of Kazuo Shiraga

引用:

1. 『半ドン』No.131・132合併版、半どんの会、1998年

Map:

